

シラヒゲウニ移植放流に関する技術交流会

1. 目的

久米島は仲里・具志川両村からなる人口9,800人の農・漁業を主体とする離島である。漁協の組合員数は合計331名、漁業及び養殖業生産量は平成6年度実績で764t、生産額は591百万円である。そのうちクルマエビは漁業は5t未満の小型船による日帰り操業が主体である。

漁業の概況としては主なものは釣漁業が一本釣り、パヤオ、曳き縄、イカ釣り、網漁業が刺し網、小型定置、その他採貝、採藻、潜水器漁業、養殖漁業としてクルマエビ、モズクがあげられる。

久米島周辺の浅海漁場は島の東西に発達したリーフがあり、モズク、採貝、採藻、網漁業等が行われている。しかし、水産資源は赤土流入等による環境悪化、乱獲等により資源の減少傾向がみられ、特に定着性のシラヒゲウニやシャコガイ資源の減少が著しい。シラヒゲウニの移植及び人工的に種苗生産し、中間育成された稚ウニを放流、その後の資源管理を徹底して漁獲増の実績のある今帰仁漁協ウニ部会と交流を図り、久米島周辺海域でのシラヒゲウニ資源管理に関する青壮年部活動の一環として技術導入を図る。

3. 交流年月日

平成9年3月27日（木）

4. 交流場所

今帰仁村字古宇利 今帰仁漁協 ウニ部会
30名

5. 参加者

久米島漁協青壮年部

部長 与座嘉雄 部員 比嘉政治

6. 交流地の概要

今帰仁村は沖縄本島北部、本部半島の北東部に位置し、那覇市からは北へ約85kmの地点があり、名護市と本部町に隣接、北側は東シナ海に面し、北東約1.5km沖合いに古宇利島がある。平成8年版今帰仁村勢要覧によると、人口は96百余名、その3割が農・畜産業に従事、基幹作物はスイカ、サトウキビ、野菜類、果樹等、花き（主にキク）畜産関連では肉用牛、養豚が盛んである。

水産業については延縄・一本釣り・定置網・三枚刺し網の沿岸漁業を中心にウニの増養殖に力をいれている。近年の漁業生産量は420～550tの範囲である。

7. 交流経過

今回はシラヒゲウニの移植放流が主体であるが資源管理に関する技術習得も兼ねていることから視察範囲を拡大、視察初日の3月27日は豊見城村と根地先におけるシャコガイ養殖場を見学した。

糸満漁協与根支部組合員の国吉氏の案内によりヒメジャコの当年貝から5～6年経過した殻長10cm以上に成長し、整然と埋め込みされ、管理のいきとどいたヒメジャコ漁場を船上から眺め、あまりの見事さに感嘆し管理の大事さを痛感する。遊魚者や同僚組合員による密漁がたびたびあり大きな問題点であり、困難性があると指摘された。

その後、水産業改良普及所を表敬訪問、水産試験場内飼育施設の見学を行う。午後から自動車道を北進、本島本部在栽培漁業センターを訪問、シラヒゲウニの種苗生産を担当している仲盛研究員から餌料培養・種苗生産・中間育成に関する説明後、中間育成中のシラヒゲウニ水槽

群を見学、ついでに栽培漁業センター内の施設の視察を行う。

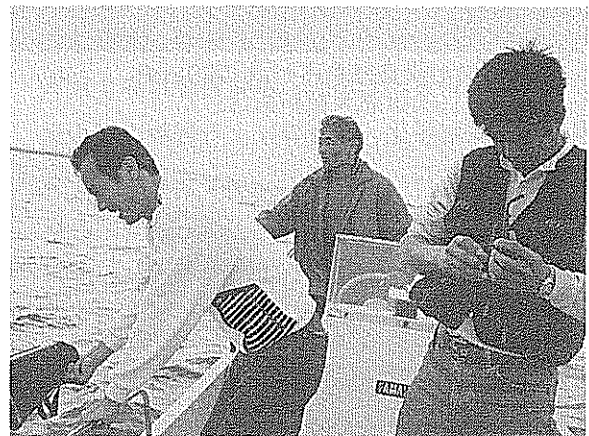
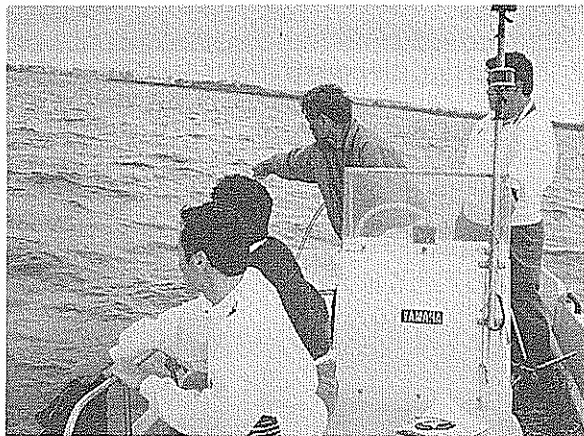
その後本部漁協に移動、栽培養殖生産部会が運営している海洋レジャー施設及び魚類養殖施設、クロマグロ養殖施設等を視察、担当部員から概況説明をうけた。

午後6時今帰仁漁協に到着、ウニ部会員の漁船により、古宇利島へ午後7時から改善センターにおいてウニ部会との交流会を実施、詳細についてはウニ部会の設立から現在までにいたる経緯、ウニの移植放流や資源管理については、H8年8月15日に平良市漁協と同様であるので省略する。

翌日はウニ部会役員の案内により栽培漁業センターで種苗生産、中間育成された後、古宇利

島東海域の近場で放流され管理されているウニ漁場を視察、ついで天然産が多く生息している場所もみせてもらった。

久米島ではシラヒゲウニは無差別に漁獲され、乱獲による資源の減少により漁獲量の減少傾向がみられている。古宇利島は本島に近く密漁等の被害にあいやすい場所がらでありながら徹底した資源管理によりウニ資源の有効利用を図っている。久米島でも漁協内部あるいは部会が結束し、資源管理体制（密漁対策・操業日程・操業方法・その他）の確立を図っていくようにすれば充分応用可能と思われる。ウニ資源に限らず定着性の強い（シャコガイ・その他の貝類等）水産生物も同様である。今回の交流会の成果が生かされるよう青壮年部の活動に期待したい。



豊見城村与根地先 シャコガイ養殖場視察



本部漁協 栽培養殖部会の養殖筏視察